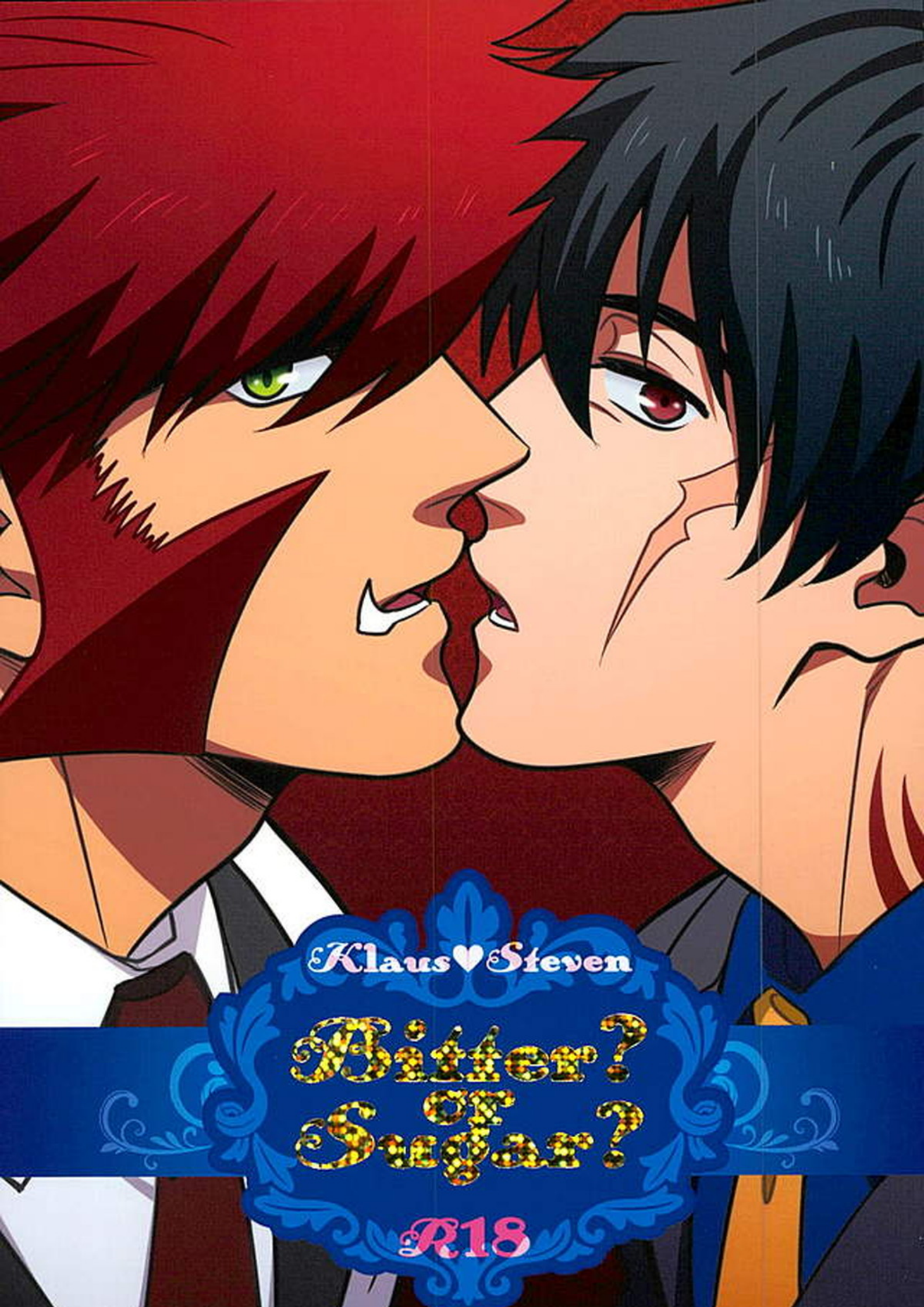

Klaus♥Steven
Bitter?
or
Sugar?
R18

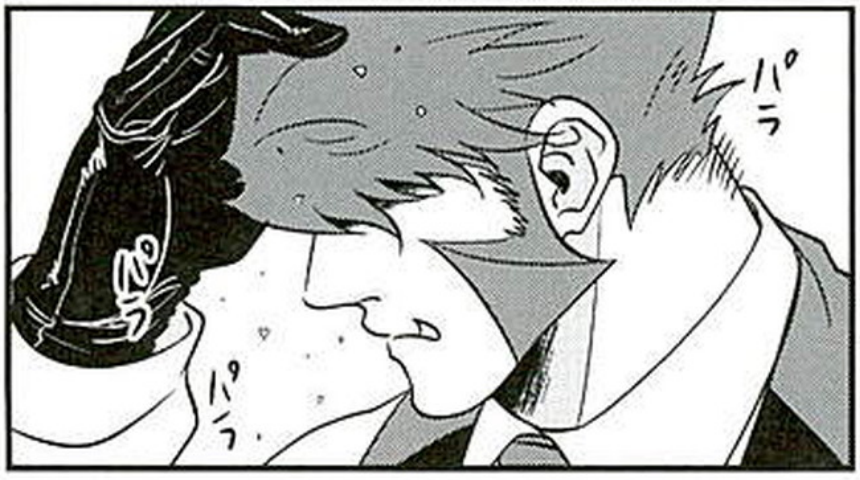
君の髪を乱したいと思っていた

マツジ

なんだ？

― 数時間前 ―

ズズズ
パラ
パラ
パラ
ガラ
ガラ
ガラ
スティーブン
大丈夫かね？
あぁ
こっちも
片付いたよ



なんて

仕事中に考えることも増えたなぁ〜

ファーファー

旦那〜スターフェイズさん こっち終わりましたぜ〜

……良いだろ別に

よーし撤収ー

頭の中は自由だ

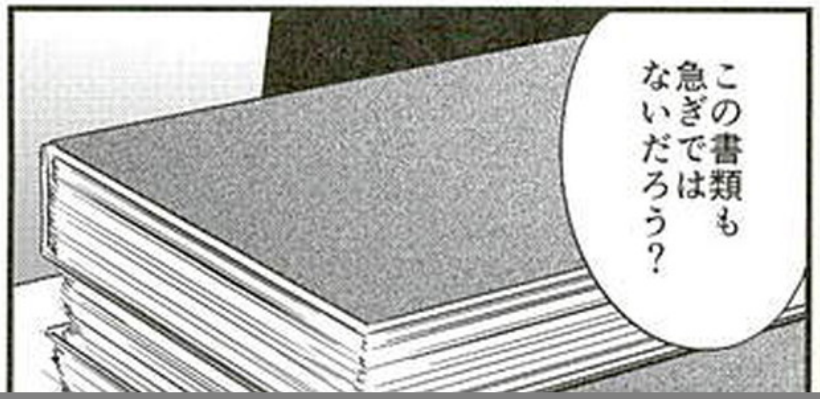
……

お疲れ様でした～
あぁ お疲れ
スティーブン

ん？
この後は空いているだろうか？

あぁ…特に予定は入れてないよ

久しぶりに飲まないかね？
ε


この書類も急ぎではないだろう？

OK
ばさっ
ふむ
それは非常に興味深い話だ
そう言うと思ってね資料を手配しといたよ
来週までに届けてもらうさ
そうかすまない
コッ
カラ
で？
本題はなんだい？クラウス

何年君の側に居たと思ってるんだい？
それくらい分かるさ
しかもここは君のプライベートルームだ
君が言い渋るなんて珍しいな
余程の案件かい？
いや…そうではない
カラ…
ただ
私も先程気付いたばかりで動揺していたのだ

動揺？
君が？
君には心に決めた女性が居るのだろうか？
スティーブン
な
急に何言い出すんだクラウス!?
先日見かけたのだ美しい女性が君を引き寄せてキスを…
もしかして仕事を見られたのか…？
いやクラウスそれは…
そういう事を生業にしている女性で
僕に決めた女性は居ない

そうか

フッ

ミ

ギュ

クラウス？

ずっと考えていたのだ

優しく君を引き寄せたあの手が

ギッ

なぜ私のではないのだろうかと

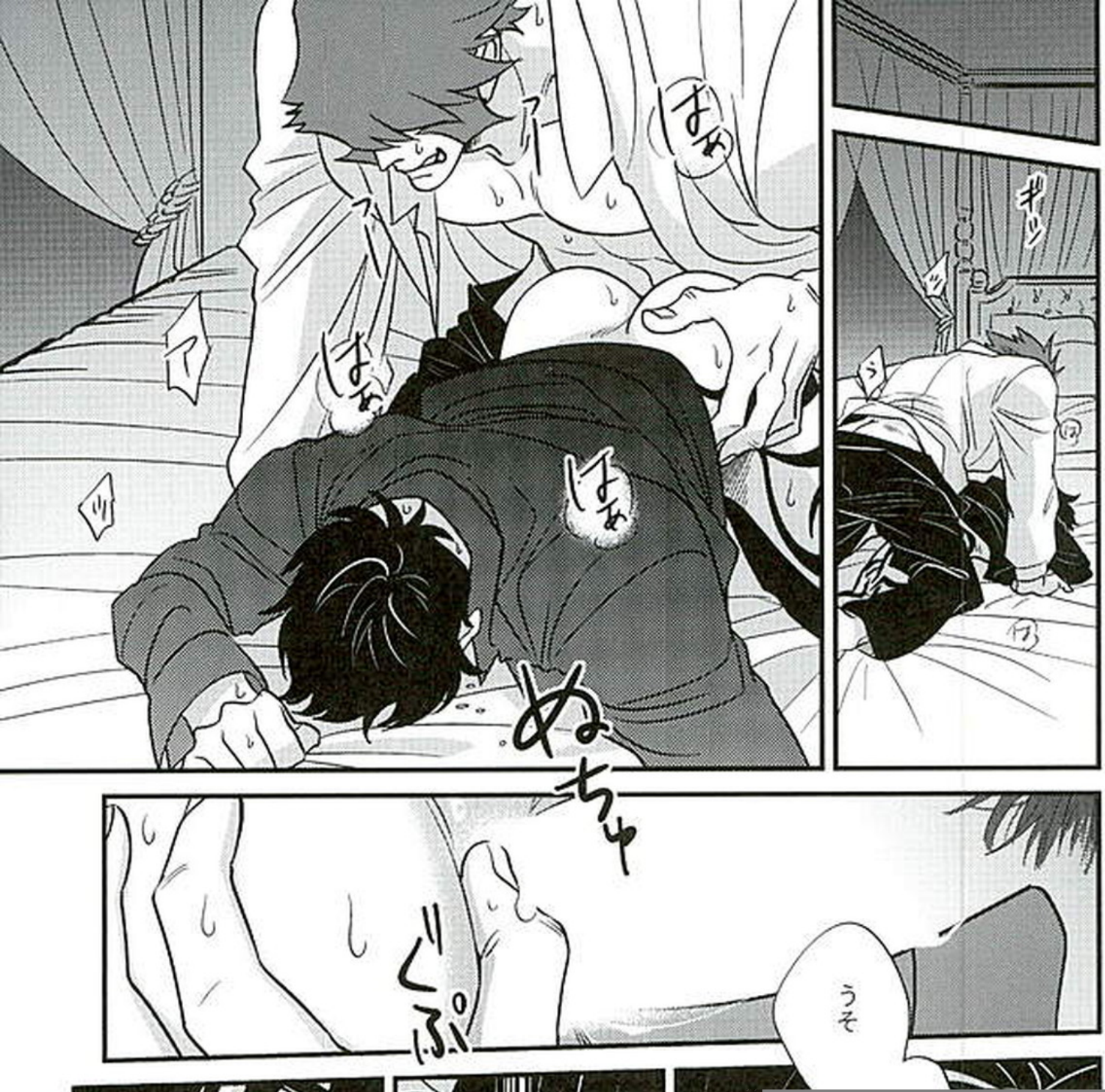
なにを…
心に秘めるつもりでいたが…君の目を見て確信を得たのだ
普段君がどんな目で私を見ているか知っているかね？
今の私のような目だ
スティーブン

……クラウス
それは
君の
気のせいだ
…君が
長年
私の側に居て
私を理解して
くれている
ように
私も同じ
歳月を君の
側で過ごし
君を見て
来たのだ

君の中に宿る熱と
私の中に宿る熱は
ごくっ
そうだった
そっ
同じではないかね？
確信を得たクラウスは――
スティーブン

私が気付かないとでも？

容赦が無いんだった――…


はぁ
はぁ
はぁ
ア
ア
ギッ
ぬちゃ

ぐぷ
うそ

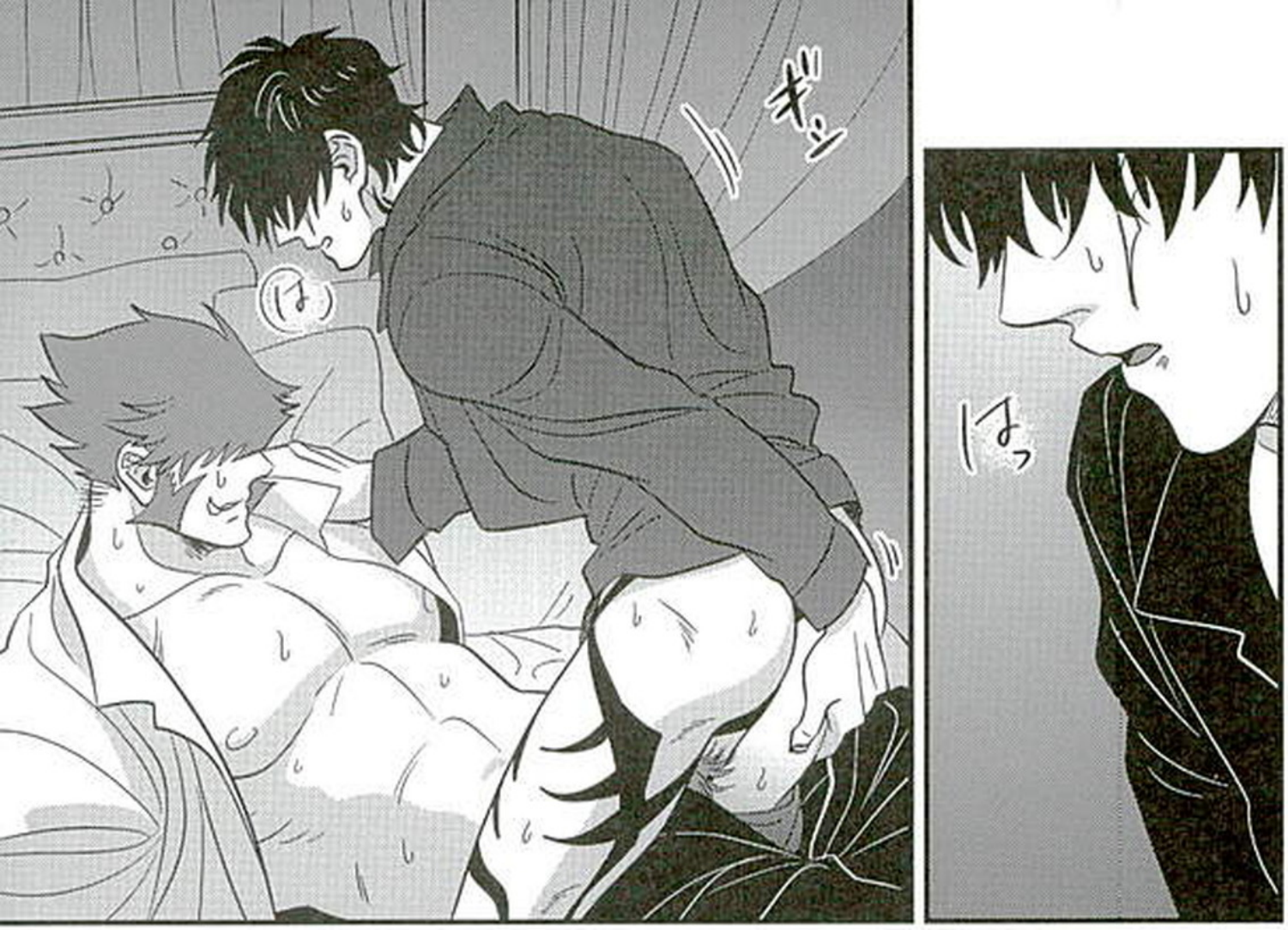
はぁ
はぁ
はぁ

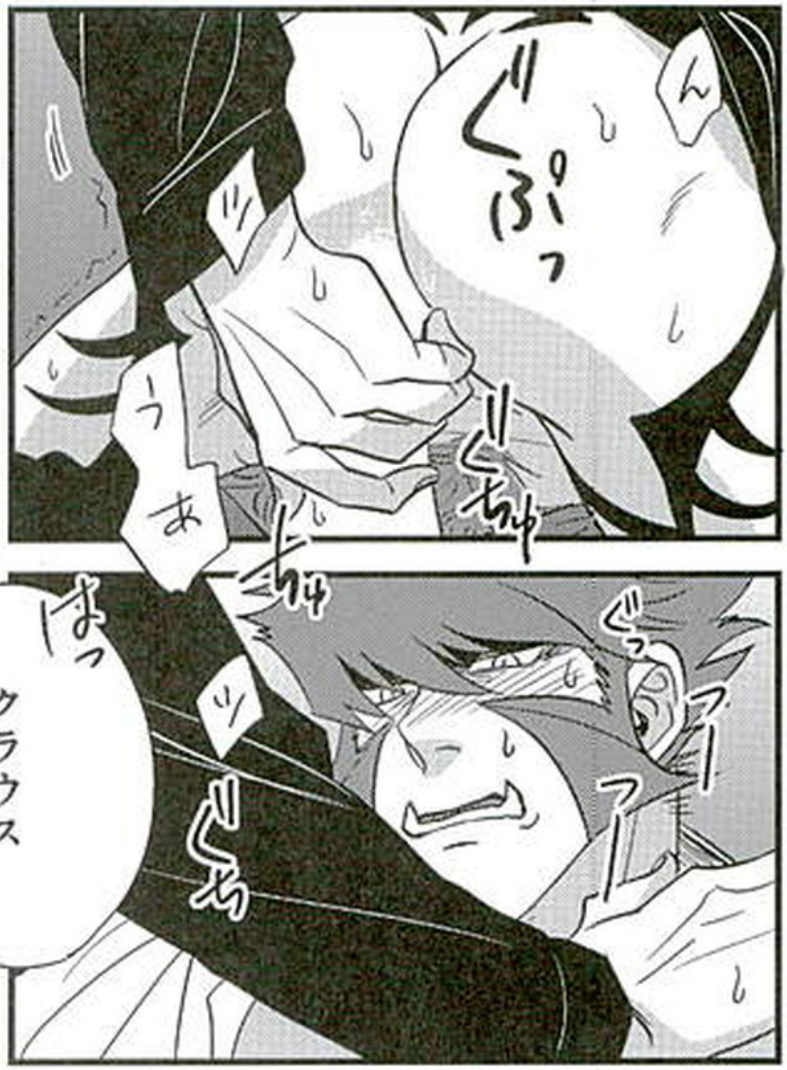
ポタ
ポタ
ポタ
スティー…ブン
はっ

くいっ
！
ああ
くそっ

むぐ
ちゅく
ツプ

はぁ
ペロ
クラウス
一旦
抜いてくれ…


ギュ
はっ
はっ


ん
ぐぷっ
ツ
ぐちゅ
ぁ
ぐちゅ
ぐっ
ツ
ぐちゅ

はぁ
はぁ
はぁ
はっ
クラウス
君を

俺に
はっ
ぐっ
ドサッ
ハッ
かはっ
ぐっ
イッ

시

あぁ
その件に関しては
私からスティーブンに伝えよう
うむ
ではまた後程
Pi
ん…
ガバッ
すまないクラウス！寝すぎた！
今支度
バサッ
を…

ちゅっ
今のは パトリックからだ
そう焦らなくとも大丈夫だ落ち着きたまえ
おはようスティーブン
…
あぁ
へ？
おは…ようクラウス…

まさか

君とこんな朝を迎えるとはね

…

君って

結構情熱的なんだなぁ

想像と違った

考えた事があるのかね？

君は？

…考えなかったと言えば嘘になるだろう

君の気持ちを知るまでは…

君への裏切りになるのではないかと

…そうか

ぐいっ

ぐしゃ

ぐしゃ

ぐしゃ

!?

?
くしゃ
君らしいなぁ
俺は…
どうしよ
ないく

クラウス！

君はまた、一人で背負うんだな
クラウス
あっちも片付いた
終了だ
…お疲れ

スティーブン君の方は…
問題ない
撤収だ キャンプまで戻れば 君は迎えが来てるだろ？
降ってきた
取り敢えずどこかしのげる所に…っ

まったく情けない事に、横に並んで一緒に泥水にまみれることくらいしか

俺には…してやれることがない

…クラウス

…っ
なぁ
雨で窒息しそうだよ
雨宿りしよう…クラウス
ザァァァ

おお

こりゃすごい

久しぶりに来たら
ほぼジャングルじゃないか
よく育ったなぁ

うむ

土と水の相性が
思いの外良かった様なのだ
非常に成長速度も速い

へぇ面白いね

ああ
特にキジカクシ科の
植物はよく育っている

…キジカクシ？
どれだいソレ…

スティーブン！

ぱら
ん？
な…！
うわっ!?
何…
スティーブン！
すまない！
丁度スプリンクラーの
作動時間だったのだ
うっかりしていた
早くシャワーを…
クラウス
風邪を引いては！

クラーウス

！

きゃ

大丈夫だ

慌てすぎだ
俺はレディじゃないんだ

牙狩り時代は
いつもこんなだ
泥だらけの汗ま

セックスだってした
…からかわないでくれ給え
あはは
悪い悪い水被ったらなんだ懐かしくなっち

僕も君も若かったって事だ
ここはジャングルじゃないし
ドアの向こうには熱いシャワーもある素晴らしいね
…クラウス？

…なんだい？

君も、懐かしくなった？
…当時の私は
自らの腕の長さが
足りない事に歯噛みし
事あるごとに懊悩するような

そんな未熟さを
君にぶつけていたのだ
そして何より
任務が明ければ
君との別れがあった
次にいつ会えるのか
また君と
バディが組めるのか
…今思い返しても
恥じ入るほどに
君との別れが
辛かったのだ
スティーブ

呆れられても
致し方ない
呆れる…ね

俺と離れるのが辛かった？
…うむ
もうバディが組めないかもと不安だった？
うむ

…そんなの

俺の方が百倍不安だったぞ

ブレングリードのお坊ちゃん

…スティーブン

こんな事を
言うべきでは
ないのかもしれないが

どれ程の
混乱の中だとしても
私はこのHLで

今、君と
共に在れる事を

幸福に思う

…すぐシャワーも
浴びられるし？

For thee against myself I'll vow debate,
For I must ne'er love him whom thou dost hate.

Shakespeare/SONNET LXXXIX

END

Next Special Guest

は随分短くなっていた。
「時差ってもんはここでも有効だからなあ。あと一時間で来る筈の連絡を待たないと、うちの資金繰りがな」
「あ、スポンサーさんの……」
「そうそう。見込みが大幅に違ったら、事業計画を見直さなくちゃいけない」
早く向こうの会議が終わってくれないもんかねぇと画面をつつきながら、スティーブンはデスク前のレオナルドに笑って見せる。
「まあそう言う訳だから、今日は暫く居残りだ。気にせず先に帰って良いぞ」
「解りました」
それじゃあ、と頭を下げてデスク前を離れ、退出しようとドアを半分開いた所でレオナルドが動きを止めた。振り返り、尋ねる。
「あの、こっちの灯り点けておいた方が良いですか？」
そう言いながら灯りの消えてしまっている方を指さす彼に、スティーブンは目を丸くした。
「いや、どうせ俺一人だしなぁ。大丈夫だが……どうしてだ？」
優しい少年の心づかいがどこにあるのかが解らず、スティーブンが首を傾げながら尋ねると、レオナルドは慌てたように顔を赤くする。あ、そうですよね、ですよね！と焦ったように手を振る様子は、実年齢より彼を随分幼く見せた。
「俺、前に部屋追い出された時、ここに間借りさせて貰ってたじゃないですか」
「ああ、あったな、そんな事も」
懐かしいなあと頷いていると、レオナルドが恥ずかしそうに頭を掻く。
「ここで寝るのって、何か凄く寂しかったんですよね。昼間は皆がいて賑やかで明るいのに、誰もいなくなったら静かで凄く部屋が広く感じちゃって」
真っ暗な中に飲み込まれそうなくらい、と言って、レオナルドが灯りの消えた側に目をやるのに釣られ、スティーブンもそちらへ顔を向けた。
空のデスク。誰も座っていないソファ。向こう側に闇しか広がっていない窓。
がらんとした、空虚な景色はどこか見た覚えのある、デジャヴュを感じさせた。
自分は、よくこれを見ている。
胸中に浮かんだ何かを確かめるよりも前に、スティーブンの意識を声が遮った。
「でも、スティーブンさんがそんな風になんて、思う訳ないですよね！　やだな、俺、恥ずかしい事言ったなぁ」
今の、内緒にして下さいねとレオナルドが照れくさそうに笑う。それに笑って頷きながら、スティーブンはそこここにあるデジャヴュの輪郭を捕らえた。
自分がいつもいる所にそれはとてもよく似ている。
誰もいない、虚無に満ちた空間。厚い氷越しに見る世界。氷に乱反射して目を刺す光。

少年の言う、寂しいと言う気持ちは一体どんなものだったろう。
笑顔を貼り付けたままのスティーブンに、ドアを開けながらレオナルドが言う。
「あ、じゃあ俺、これで帰りますけど、コーヒーか何か、もしいるなら……」
「レオナルド君。こんな遅くまでどうしたのだ」
突然、中途半端に開いていたドアから、背を曲げながら男が入ってきた。それを認めた瞬間、スティーブンは目の奥に微かな痛みが走ったような錯覚に襲われる。
部屋を満たす光量は、変わっていない。
「ちょっと報告書を作るのに、手間取っちゃって……。あ、でももう帰ります」
「そうか。外はもうだいぶ暗い。気を付けて」
「クラ～ウス。少年に言う前に、君は一体何で来たんだ」
お疲れ様でしたと頭を下げるレオナルドを、ドアを押さえて送り出した後、部屋に踏み込んできたクラウスに、スティーブンは呆れ声で言った。
「今日は国の御家族と食事じゃなかったのかい。スカイポ越しの」
「勿論、それは済ませてきた」
そう言いながら、クラウスは持っていた紙袋からタンブラーを取り出し、スティーブンのデスクに置いた。少しだけそれを見詰めた後、手に取る。タンブラーの中でたっぷりと入った液体が揺れる感触が微かに伝わってきた。
「ギルベルトさんお手製かな？」
「コーヒーの大量摂取は胃に良くないだろう」
飲み口の蓋を開けると、中から湯気と共にふわりとミルクと茶葉の混じり合った香りが立つ。三十路男にミルクティーかと、スティーブンは苦笑いを漏らした。
「これはありがたく戴くけどな。どうしてまた戻ってきたんだ。君が仕事を残して帰る訳も無いし」
忘れ物と言う柄でもないだろうと、タンブラーに口を付けながら尋ねると、クラウスが自分のデスクの椅子に腰かけながら当たり前のように言う。
「君がまだいたからだ」
「……うちのボスは、職務規定を何だと思ってるのかねぇ」
困ったもんだと眉を寄せて笑うと、クラウスは不思議そうに首を傾げた。その様子に表情を緩めながら、PCを突いて見せる。
「これは俺の仕事だ、クラウス。ボスの君が付き合う事じゃないだろ？」
「その表現は、正しくない」
スティーブンの言葉を、クラウスが手を上げて制した。
「私はボスとしてここに来た訳ではないのだ、スティーブン」
クラウスはいつでも目を合わせながら言葉を紡ぐ。乱反射する目を眇めた所で、きっと笑った様にしか見えないだろう。その術をスティーブンは、もうだいぶ前から会得していた。
「何だ、部下を気遣う優しいボスって訳じゃあないのか」
からかうような口調で言うと、クラウスが少しだけ困った顔をする。その困り顔に笑い、スティーブンは手を振って否定してや

った。
「クラ〜ウス、本気に取るな
いさ」
本音だった。クラウスにそ
だの一度も、ありはしなかっ
クラウスに、それで?と首を
「じゃあ、僕に退屈な時間を
りにきてくれたのか?」
笑いながら、分厚い氷のこ
ないかを確認するような心持
な、空気が違うような、そん
ちりちりと炙られるような
「スティーブン」
「何だい?」
知らずに胸中で駄目だと呟
に解っていた。
彼の口を、閉ざさなくては
パソコンの画面をちらりと
い。今の空気を壊す手立てを
かに震えた。
自分は何かを、恐れている
恐れている。恐れているの
クラウスの瞳の緑が光を弾
一つ譲らない強硬な意志が腰

「誰にそんなもの仕込まれたんだ？　ギルベルトさん…事は無いだろうな」
努めてからかうような口調で言う。そうであって欲しいから願った。
けれど。
「ジョークのつもりは無い」
宣誓するかのような重々しさでクラウスが言った。
「君にとっては、迷惑な話だろうか」
真っ直ぐにこちらを見つめる目は、微かに申し訳ないとげな色を浮かべていた。ほんの微かに。それだけだ。
彼の意志が揺らぐ事など、ある訳が無かった。
発する言葉を覆す事など、ある筈も無かった。
そっと分厚い氷の壁を確認しながら、スティーブンは困表情に見える様に眉を寄せた。ほんの少しの驚きと、それう少し多めの動揺と。
強張ってしまった唇を動かし、言う。
「出来れば、聞かなかった事にしたいところだ」
「……」
なるほどと呟きながら、クラウスが両手を組んだ。そのらされない。色も変わらない。彼に動揺は見えない。
プロフェアーを打つ時の様だと微かに思った瞬間、背えが駆け抜けた。
自分は、何手先まで読まれている？
心臓の裏側が冷えていく。

「そう、友情を」
脳が冴えていく。
深い緑に浮かぶ、平静の色を見返す。
「君は、同性愛に偏見を抱くような人物ではないと私は信じている」
「自分に向けられれば話は別になると言うのは、往々にしてよくある話さ」
しん、と空気が冷えていく。プロスフェアーの駒を操る一手が見える。
スティーブンは微かに目を細め、その一手の着地点を探った。それを捕らえ、そのままその場に氷の槍で縫い付ける。
あらゆる可能性が脳裏で巡った。最も汚い手段も、最も冷たい手段も、全てを自分は打つ用意がある。それを自分は知っている。
例え相手が誰であろうと。
例えそれが、クラウス・V・ラインヘルツであろうとも。
「君が私を軽蔑しても、それでも構わない。私達の友情の形が変わろうとも、私はそれを受け入れよう」
「……なるほど」
そんな事を言いながら。
スティーブンはほんの少しだけ、苦笑いを浮かべた。
そんな事を言いながら、欠片もそんな事が起きると思っていないんだろうと、目の前に座る男を見る。
頑強で、強固な意志を持ち、偽る事も曲げる事も知らない。
「……本当に」
本当に困った子供だ。まっすぐで曲がる事も偽る事も知らず、頑固で、残酷な。
身を起こし、スティーブンは背凭れに体を投げた。それなりに経費をかけた椅子は、物音一つ立てずに長身を受け止めてくれる。そのままゆらりと両手と足を組んだ。
「俺はね、クラウス。親友として君を尊敬している。ボスとして敬愛もしている」
「君からの賛美の言葉を、光栄に思う」
こちらを見ている目が嬉しそうに細くなる。そんな顔をするなよと、スティーブンな内心で呟いた。
君は本当に、人の負の部分を簡単に打ち捨てる男だ。
「さっきの君の言葉を無かった事にすれば、俺の中のこの気持ちは守れる。君の一存で、俺の気持ちを変えようとするのは、些か傲慢じゃないか」
酷い言いようだと思いながら、スティーブンは微笑んで見せる。事実それも本心だった。
その言葉に、クラウスの目から笑みは消え、代わりに困惑に似た色が浮かんだ。
「スティーブン」
「なんだい？」
クラウスが己の膝に肘をつき指を組む。多少前屈みになったところで、彼の視線が上から降ってくるのは変わらなかった。
「私はそれも、了承しているのだ。君に告げようと決めた時から」
その程度の覚悟すら、していない男と思われたのだろうかと、

クラウスの眉が少しだけ下がる。じわりと冷たい汗が背筋を伝った気がした。読みが甘かったらしいと、内心舌打ちをする。
思っていた以上に、彼は捨て身だ。
「君に軽蔑されても構わないと言った筈だ。ただの無害な友人だと思われ続けている位ならば、いっそ君の軽蔑が欲しい」
「……恐れ入ったね。君にそうまで言わせるなんて、俺も大したもんだ」
苦笑いして見せながら、スティーブンは頬を掻いた。
それでも体内は冷たく凍る。自分は冷静なのだと、少し安堵する。そのままスティーブンは、己を真っ直ぐ見ているクラウスを見、苦笑いを顔に貼り付けたまま頭の片隅で考えた。
彼は引かないだろう。その行動は、ここまで覚悟を決めた彼の中に選択肢としてある訳が無い。拒絶するか、受け入れるか。二つに一つしか彼は認めないだろう。
変えたいのだと、彼は言った。自分が拒絶しても構わないと。だが、果たして自分がそう出来ると彼は思っているのだろうか。そして自分は。
長く息を吐く。溜息にも聞こえるだろう。
ぐしゃりと前髪を掻きあげる。
「君は、ここで俺が君を拒絶しても、明日からのライブラは変わらないと信じているんだな」
「勿論だ」
「君らしい」
考える。どうすれば良いのか。自分が作り上げてきたこの世界を、どうやったら
「……どうして俺
「理由など、無意
「正論ばかり言う
小さく笑うと、
そうか、君も緊張
「結論から言うと
軽蔑するのも無理
どうせ君にはわ
ても、クラウスは
君は本当に困っ
そうやって俺の
君は一体何を得た
君が今望んでい
に。
クラウスの頭上
めた。己の周りにあ
これから取る手
れを彼も承知して
としている。自分
笑いが漏れた。
何てこった、ク
トを、世界を守る
経をすり減らすだ

ようとしてい
「クラ〜ウス
笑いながら
た視界の中、
「ここで君を
ると言うのも
「君は、友情
「買い被って
ひらひらと
答えを待つク
「俺は、そう
そう言って
らになる。
「そうなると
「……」
クラウスの
を何と称すれ
笑みを堪え
でも内側から
解るだろう
つまり、彼
負は、次の展
「それは、私
「ビジネスと

please.please.me
メグロ正宗

ヨロっ
っ起きていたのか・・・・

スティーブン！

驚いたのは僕の方なんだけど？

休憩がてら少し目を瞑っていただけだったんだけどラッキーだったな！

何だい？

寝てた方が都合が良かったのか？

？

しゅん？…

っ！

そういうわけでは！

じゃあどうしたって言うんだい？

そんなガッカリしちゃって（笑）

ガッカリなどしていない

むっ

頑固者め

オー

嬉しかったのかい？
・・・その通りだ
キスしたくなる程？
その通りだ
はぁはぁっ!!
でも寝ていなかった！
この男を

跪かせて

どうして欲しい？
クラウス

願いをきくなんて

神にでも
なった気分だな

別に
君に気を許していない
訳じゃないんだけどな

ただ俺が
お前の前で恰好
つけたいだけなのに

じゃぁ〜

これからは君が先に起きて僕を起こしてくれ

そして一緒に朝食を作る！

素晴らしい！

僕にしか叶えられない願いだ仕方ない！

ニヤニヤ

コツン

早起き頑張ってくれよ？ふふっ

クスクスっ

他にも何か
願い事はあるかな？
・・・もう一度
もう一度、今ここで
キスを・・・スティーブン
ズリッ
嬉しいお願いだな

逃避行

フユウ

――嗚呼。繰り返されるのは、延々と続く暗澹たる日常。
謳うように、彼は口にした。
――ただ生きているだけだというのに。決して安らぐことはないのだろう。
――それでも、霧煙るこの街で生きていくことに、幸福を見出していたのも事実だ。
彼は、恋い焦がれる少女のようにその瞳を輝かせていた。
同時に、追憶に耽るかのように、その瞳を濁らせていた。
――太陽の光すら満足に届かない、血生臭い異界都市。
――ヘルサレムズ・ロッド。
凛とした声に名を呼ばれた。
その街は、きっとそれが嬉しかったのだろう。
絶望と慟哭。喧騒の中でも、彼が立つその場所だけは、おぞましいほどの静寂に満ちていた。
彼は街に別れの言葉を告げた。
そうして彼は。動くことが出来ないでいるその男の手を取って、恭しく口をつけたのだ。
その時だ。
何かが、崩壊していく音を聞いたのは。

「――例えこの世界がどんな地獄と化そうとも、俺には君さえいればいい」

「――……」
眩い光が瞼を透かして瞳へと差しこんでくる。
何かがおかしい、という気持ちとともに、ぼんやりと瞼を開いてみれば、何らおかしいことはないのだと、強張った肉体の力を解く。
ベッドの上で、琥珀色の瞳が、真っ直ぐにこちらを見据えていた。
初めて出会った時から、その瞳は澄んだ色をしていたように思う。冷徹を湛えるその瞳の中には、一方で、燃えるような熱情が潜んでいる。
奥行のある彼の瞳は、きっと彼の心、そのものだ。
彼の心に辿りつくには、何重にも張り巡らされた扉をこの手で開け放っていかなければならない。
「――……夢を見ていたようだ」
覚醒したばかりで、声が掠れていた。スティーブンは瞳を細めた後、いつものように、口元を歪めた。
「へぇ。君が見る夢か、気になるな」
ギシリと、ベッドスプリングが音を立てる。あたたかい肉体の熱が消えていく。裸体を惜し気もなく晒しながら、スティーブンは腕の中から擦り抜けていった。
「今日は、どうする？」
いつもの会話だ。
音を立てて、カーテンが開かれる。真白い朝日の差し込む寝室で、瞳に感じる強い光を瞼で防ぎながら、今日の予定を思い浮かべてみる。
「君を抱く」
「……。それは、数時間前に済ませたことじゃなかったか？」
クラウスと、スティーブンは呆れたように眉を寄せた。咎める時の口調で名を呼んで、彼はまた、笑った。
ベッドから腰をあげると、彼は逃げることもなく、硝子扉の前で外を眺めていた。
燦々とした太陽に照らされた、一糸纏わぬ彼の裸体は美しい。しかし、外に人でも通れば丸見えだろう。早々に窓辺に近づき、細い身体を抱き寄せる。硝子扉の向こう側に人影はなく、安堵の息を吐く。あるのは白い浜辺と、砕ける白波だけだった。そんなこと、わかりきっていたはずだというのに。
ここはヘルサレムズ・ロッドから遠く離れた南国の島。小さな集落がぽつりぽつりとあるだけの、静寂に包まれた自然の楽園だ。島の人々は皆自分たちを歓迎し、広場に行けば時折言葉を交わすことはある。しかし、辺鄙な場所に立つこの小屋へと、彼らが立ち寄ることはなかった。
しばらく、青い海と誰もいない砂浜を眺めながら、太陽の光に身を焼かれていた。
目の前に広がるのは、あの街とはあまりにもかけ離れた景色。夢で見た景色が、酷く懐かしく思える。

「死ぬのは怖いかね？」
硝子に映る彼は、酷く驚いたような顔を作ってみせた。
「俺はとっくに、捨てたよ。そんな感情は」
「ふむ」
「……わかったよ。そうだな。もしかしたら、怖いのかもしれない」
スティーブンは、自分の肉体を閉じ込める男の腕へと、その細長い指先で触れた。
「君と、離れてしまうことが」
するりと、皮膚の上を彼の爪の先が薄い痕を残していく。そうして指先が辿りついたのは、いつの間にか強く握り締めていた、男の無骨な太い拳の上だった。
「全部夢だったらいいと思った。今は本当に夢みたいに感じているよ。まさか、……こんな平和が訪れるなんて」
拳が開かれ、彼の指が掌に絡まる。
腕の中で、振り向いた彼は、今にも溶けそうな表情で微笑んだ。
「離れることはない」
強く口にすれば、彼の表情は僅かに曇った。
それは、彼が望んでいることだった。
未だに彼自ら口にしていない事柄だとしても、長年戦場をともに駆けた戦友として、愛し合う者として、理解できてしまう。
今もそうだった。彼の柔らかな黒髪に獣のように頬ずりをすれば、後頭部をくしゃくしゃと撫でられる。「君は甘えるのが上手になったな」と。無邪気に笑いながらも、内心では、今やるべきことではないだろうと呆れているのだろう。
彼の手首を掴んで、硝子扉へと押しつける。その瞳が、本心から驚いたのを確認してから、小さく開いた唇に噛みついた。
その唇は甘かった。まるで花の蜜を吸っているかのようだった。奪うことがこれほど甘美であるということを、教えてくれたのは彼が初めてだ。
「……っ、クラウス」
咎める彼の膝を撫で、そのまま上へと撫で上げていけば、彼の余裕はなくなっていく。戦闘から離れ、少し柔らかくなったように思えるその肉体の感触を楽しんでいれば、唾液で光る彼の唇が、再び男の名を呼んだ。
「クラウス」
その瞬間。
凄まじい破砕音がさざ波を掻き消した。
「――――」
散らばる破片に、皮膚が裂かれる感触がした。
ほら見たことかと、スティーブンが背後で嘆息する気配がした。
背中を合わせ、敵を察知する。仕方のないことだと、彼もわかっているはずだ。
この時間を、ただ邪魔されたくないだけなのだ。
「今日見た夢の内容、聞かせてくれよ」
スティーブンが素足の爪先でそっと木板をなぞる。途端、眼前に現れた敵が一瞬にして凍りつく。拳で破壊してしまえば、後に残るものは南国には心地の良い冷気だけだ。

彼の問いかけに、あの薄暗い光景が蘇る。
再構築され、異界と混ざり合った都市。
あの街こそが自分達の守るべき世界だった。
「――君が、まだ人間だった頃の夢だ」
ヘルサレムズ・ロッド。
「なるほど」
見知った顔の牙狩りを殺して、彼は振り向く。
スティーブンは、その口元を血で汚しながら、満足そうに微笑んでいた。
ぶわりと、全身の毛が逆立つのを感じた。
「スティーブン・A・スターフェイズ」
憐れなことに。
彼の美しい瞳には、目の前の男しか映っていないのだ。
「死にたくなったらいい給え。――その時は、私が君を密封する」
彼はもう、人間ではない。
スティーブンはその艶やかな琥珀色の瞳を丸く開いた後、少しして、猫のように細めた。
「ありがとう」
どこまでも透明に澄んだ笑顔は、この運命を呪い、この生を終わらせることを願っているかのようにも見えた。しかし、瞬きの後、彼はいつもの彼の表情に戻っていた。そう見えたのはきっと、彼ではなく、彼の前の男が、そうであれと願ってしまっているからなのだろう。
「さて、クラウス」
薄い氷をロープのように痩躯に巻き付け、スティーブンは片手を持ち上げた。
まるで、聖母の偶像のような美しさに、悪寒がした。
「今度は、どこに行こうか」
彼はもう、狂ってしまっているのかもしれない。
背に氷の翼を纏い、こちらに手を伸ばしてくる彼は、我が最愛の友であり、我が最大の敵だった。
その手をとれば、恭しく口づけられる。
ふわりと身体が浮いた。
「君も大概狂ってるよ」
言葉に出していないというのに、彼はそんなことを口にして笑った。
まるで少年のような、無邪気な笑みだと思った。
「さあ、いつもの逃避行だ」

Bitter? or Sugar?

はあ

はあ

やさしい牙　ブランコ

何だい？クラウス
脚で扉を閉めた事なら
両手が塞がってたんでね
許してくれよ
いや、彼の容態は
どうかと思って…
熱が随分
高いの
だろう…？
私が驚かせて
しまったせいだ…
妬けるね
君の牙は隠せない
獣のそれだ

心配しなくても熱なら下がるさ

はい

すまない助かった

起きた時にまた君を見て卒倒しないようギルベルトが戻ったら少年を自宅に送ってあげると良い

ああ、そうしよう君が来てくれて

お礼ならキスでもひとつもらおうか

人間なんか一溜りもない

カツ

ちゅっ

だから　きっと

俺くらいだろう

「助けてくれ！　スティーブン」

君の

しまい切れない牙を

可愛いと思う
なんて物好きは

sweet junkie kiss

いちこ

人間に生まれついての貴賤などない。貧しくとも高潔な精神の者もいるし、金持ちでも卑屈な者もいる。

しかしながら、生まれついての生粋の貴族という者が存在することをスティーブン・A・スターフェイズは経験として知っている。教養があり知的かつ優雅、鍛えあげられた肉体は僅かな緩みもなくそれ自体が芸術品のようだ。そして何者にも屈しない強靭で高潔な精神。家柄的にも肉体的にも精神的にもいい意味で、彼程貴族的だという言葉を体現している人間はいないだろう。

そう秘密結社ライブラのリーダーであるクラウス・ヴ・ラインヘルツという男はまさに『生まれながらの貴族にして生粋の紳士』を体現しているような男なのである。

＊　＊　＊

―さて、閑話休題。

『崩落』により異界と現世が交わる異形の都市、元紐育、現ヘルサレムズ・ロッドの一角に居を置く秘密結社ライブラの事務所の片隅で、スティーブン・A・スターフェイズは目の前の光景をどうしたものかな、と思案しつつも長い脚をいささか行儀悪く組み替えた。

異様なことが起こることが日常のはずのここヘルサレム

ズ・ロッドで珍しくも平和で長閑な昼下がりではあるが、スティーブンにとっては(あくまでスティーブンにとっては)ある意味世界の均衡を揺るがしかねない事件が現在進行形で起こっているのであった。

「何難しい顔してるんすか？つか、それ早く喰わねえとパサパサで食えたもんじゃなくなると思うんスけど」

「あ、ああ。ちょっと考え事をしててな…せっかく買ってきてもらったのに悪いな」

銀髪痩躯の青年――ザップ・レンフロが怪訝そうにスティーブンの前に置かれたサンドイッチを指差した。

丁度、時はランチタイムである。ライブラのザップを始めとする若手組が昼食の買い出しに行くというのでついでに自分達の分もとお願いをしたのである。因みにスティーブンがお使いを頼んだのは某ファーストフード店のサンドイッチで、ジャンクフードはそろそろ身体にきつい歳になってきた身には野菜を増量してカスタマイズ出来る点がありがたくて、よく利用しているそれである。彼らがスティーブンのリクエストどおりに買ってきてくれたそれは時間経過のせいで、ザップの指摘どおりやや野菜も萎びてパンも乾燥によりパサつきつつあった。

水分が飛んで飲み込みにくくなったそれをマグに入った冷めたコーヒーで流し込む。はっきり言ってお世辞にも美味いとはいえないが、時間の経ったファーストフードなんてそんなものだろう。

「ついでだからそれは別にいいんスけど…ああ、ひょっとして旦那のことっスか。前、みんなでダイアンズダイナーで飯くってからすっかりジャンクフードにハマっちまったみたいっスね」

まあ、俺なんかジャンクフード食い過ぎっちまって飽き飽きなとこあるんすけど、旦那には物珍しいんじゃないっスかね。スティーブンに向かって肩を竦めてみせた。

ザップの方はもう既に食事を終えたのだろう、食後の一服とばかりにローテーブル上の灰皿を引き寄せ馴れた仕種で煙草をふかし始めた。

ザップが燻らす紫煙越しに、ここライブラのリーダーであるクラウス・V・ラインヘルツが律儀に食前の祈りを捧げた後に、ジャンクフードの代表格であるハンバーガーにかぶりつく姿があった。

並外れた巨躯のクラウスの手の中にあると、ジャック&ロケッツの特大サイズバーガーもやけに可愛らしく見える。バーガーを包んでいるワックス紙を丁寧に剥がし、器用に中身がはみ出さないようにかぶりついている。太い喉仏が上下し食物を嚥下していく。供されているのはサイドメニューだったのだろうフライドポテトに飲物はコーラとまさに定番ど直球である。(あーあ、嬉しそうな顔してまあ…そんな美味いもんじゃないだろうに)

誤解のないように云うとスティーブン自体は特別グルメなわけではない。美味いことにこしたことはないが、どこぞの気取った美食家のように高級食材の蘊蓄をたれたいわけでも女

子のように洒落たカフェ何
いわけではなく腹が膨れ
の味覚の範疇である。朝晩
ともな家庭料理にありつ
トフードの世話になること
ザップのようにほぼ酒煙
日々だった。

しかしクラウスは違う。
ら銀の匙を持っているよ
なジャンクフードではな
ピカピカに磨き上げられ
るのが彼の日常だったは

それが近頃はどうだ。
めて）ハンバーガーを口に
と変わってしまったよう
ットドッグ、宅配ピザ、タ
…ここのところのクラウ
ァーストフードで埋め尽く
中のファストフードを制覇

もちろんファストフー
くさんあるのは確かだが、
せるものだとは到底思えな
ルツォグァッツァで平常
こんないわゆるB級グル

な隻眼の金
できた。思
勢に陥って
斟酌してや
に哀れな青年
も今はそれを
　まさに言い
スティーブン
の腕がザップ
に手入れが行
突き付けられ
「あんたって
男のどこがい
　ちらりと隻
スへと向けら
のだと白旗を
「なあ、KK
「―なによ？
「―俺には理
ないんだが、
　明らかに今
いたわけでは
くらい協力し
イーブンは経

が手遅れって感じたことないわ、あたし」
辛うじて、盛大に舌打ちしてしまうところだったのを堪えたのを誰か褒めて欲しい、とKKはこころなしかズキズキしてきたこめかみを指先で抑えた。
そしておそらくそれに嬉々として付き合うのだろうクラウスにも小言のひとつやふたつ言ってやりたくなったとしても誰もKKを責めることはないだろう。
人の恋路に首を突っ込んでもろくなことにならないのは、現世でも異界でも、そしてここヘルサレムズ・ロットでも変わらない出来ごとのようだ。

＊　＊　＊

優雅なカトラリー捌きに完璧なマナー。まさに身体の内側から染みついているうつくしい所作で食事を摂るクラウスの姿はどれだけ見ていてもまったく飽きることはない。
例え、それがハンバーガーと山盛りのフライドポテトという不健康極まりないジャンクフードだったとしても、だ。
KKの案にのったスティーブンが贈ったカトラリーセットを優雅に操るその様はまるでフランス料理のフルコースを食べているかのようだ。
まあ、実際はテイクアウトしてきたハンバーガー諸々を皿に盛り付けし直しただけなのであるが。
「そんなに美味いか、それ」
「スティーブン？」
思わずぽろっと洩らしてしまった言葉にクラウスの透明なエメラルドグリーンの瞳が確かな熱量を持ってスティーブンを捉えた。理知的なそれがやや意外そうに軽く瞠られる。なんとなく見透かされたようで居心地が悪くなったスティーブンはもうこの際だからと、予てからの疑問をストレートにぶつけてみることにした。
「あー、いや…不味くなくてもその手のファーストフードは味が濃くて単調だから、こう毎日だと飽きないか？」
「ふむ、そうだな。単純に今の君の質問に答えるのなら、その通りかもしれない」
皿に残っていた若干冷めかけて油でしなびた最後のポテトを口に運びながら、クラウスが頷いた。
「ならどんな心境の変化なんだい？」
「体験の共有とでも云うべきかな」
彼にしては珍しい雑な動作で食べ終えた皿を横にずらすと、クラウスはテーブルの向かい側で頬杖をついていたスティーブンに顔を寄せた。
「スティーブン、君があんなに嬉しそうな顔をして食べているから、きっととても美味しいのだろうと思って…」
「俺がかい？」
思いもよらない回答に疑問符が頭を巡る。

今はヴェデッドという家政婦が通いで来てくれているおかげで幾らかは改善されてはいるものの、褒められた食生活ではないは自覚している。クラウスの前でジャンクフードを口にする機会は幾度もあったのでその時に見られていたのかもしれない。

しかしながら、そのクラウスの言うところの『幸せそうな顔』というのにさっぱり心当たりがない。

「君はあまりいい顔をしないだろうが、以前から気になってはいたのだ。—直接のきっかけはこの間、皆で買い出しに行った帰りにダイナーに寄っただろう?」

「ああ、あのビビアン嬢の店か」

言われてみれば、確かにそんな記憶がある。買い出し帰りに空腹を訴える部下達のためにレオナルドの行きつけだというダイナーで食事をしたはずだ。そこでハンバーガーを食べるのは初めてだというクラウスがやや緊張気味に挑戦しているのを揶揄いつつ見守った思い出である。

「そこで君があまりに幸せそうに食べるものだから、どうしても試してみたいという気持ちが抑えられなくなってしまって…」

「……クラウス!ちょっとストップ!!なんかここまでいくと何かとてつもなく恥ずかしい展開になりそうでちょっと耐えられないような気がする…—ロスタイムを要求したい」

その時のことはスティーブンもよく憶えている。しかもマスターやビビアン嬢には申し訳ないが、憶えているのはそこで食べた料理の味ではなく初めてのジャンクフードと格闘するクラウスの姿なのである。従って、クラウスが言うとおり、スティーブンが幸せそうな顔をしていたとするのならば、つまりはスティーブンがクラウスを見てそういう顔になっていたということだ。

十代の恋する小娘ならともかく、どう考えてもとうに三十路を過ぎた男が晒すには恥ずかしすぎる醜態である。

慌ててクラウスの口を塞ごうと、休戦を申し出たがあっさりとその要求は退けられてしまう。

「私も君の食べているものを共有したい、と思ったのだ。—恋人として、君にあんな顔させるものを放っておけるわけがない」

サラッと告げられた言葉は予想どおりのものであったが、その破壊力は想像以上でスティーブンはともすれば逃げ出したくなるほどの気恥ずかしさと戦うはめに陥っていた。クラウスは嘘を言わない。たったこれだけのシンプルな真実が歳下の恋人のまっすぐな愛情を余すところなく伝えてくれるものだ。

(あーあ、これだから、クラウスには敵わないんだよなぁ…)

思えば遥か昔、出逢った時のまだお互いが子供だった頃から一度だってスティーブンはクラウスに勝てたことなんてないのだ。

燃えるような赤を纏ったクラウスの顔が更に近づいてくる。太い節が高い指先に顎を取られる。男らしい頑強な輪郭に比例した大きな唇がスティーブンの薄いそれとそっと重なる。

「それでその結果は?」

「少なくともキスの味は変わらないな。でもやっぱり君のそういう顔が見られるなら、まだこの生活を続けてもいいかもしれない」

しっとりとしたキスの後、ふと思いついてそう訊いてみたら、至極真面目な顔でそんなことを言う歳下の恋人にスティーブンはもはや白旗をあげるしかない。

密かに主の身体によくない食生活を心配していたギルベルトには申し訳ないが、そんな可愛いことを言われてはスティーブンも降参せざるを得ないではないか。もう一度降ってきた案外に柔らかい唇の感触にスティーブンはそっと瞳を閉じた。

因みに、この様子をランチから帰還したＫＫをはじめとするライブラメンバーが生温い視線で見守っていたと二人に知れるのはこの五分後の話である。

キス…

クラウスとのキス……

ぼ

K
nisiki

クラウスぅ
ほーら
最後のオリーブだ〜

酸っぱらい

あーん

「数ケ月前 宅飲み。」

刺さった!

さきだヨ〜!!

むニャ

……スティーブン…

ガバ

あれ？
たべたかった？
事故……っていうかアレは『キ言えるか！
言えな

ざくっ
ちゅう
なぜだと思う…？
――スティーブン
え
え
ええ～
頃合いだろうか…
おわり

Bitter? or Sugar?

oh my God!／ほえ

先日君が追っていた「義足の狩人」について有力な情報が入った

異界のある筋から入手したので

まず間違いないだろうやはり君が推測していた通りポルツィオーネが絡んでいたようだ複数の目撃者も出ている

今日中にでも私と君で対処すれば騒ぎにはならずに解決することができるだろうと思っていたのだがその取引現場は――

――

ああ、

キスがしたい

今すぐその唇に

――

キスがしたくて堪らない！

クラウスクラウスクラウス。

どうかっ

すまない

しあわせのあかり

アマネ

真紅のスポーツカーが真夜中のヘルサレムズ・ロットを滑るように走る。

時計の針が天辺を越したとはいえ、まだまだ週末が始まったばかりのこの街は、あちこちから光が溢れ、聞こえてこないだけで賑やかな笑い声や罵声怒声がそちこちにこだましているのだろう。

己の車を危なげなく運転するスティーブンは、現在会食からの帰り道にあった。会食と言っても楽しいお食事会でも交流会でもない。ライブラに多数資金提供してくれている、とある組織のお偉方に呼ばれ、激励という名のお小言を頂戴するという、頭も胃も痛い数時間であった。

まあ何だかんだ適当にお小言は右から左へスルーさせ、それなりに殊勝そうな態度で皮肉を躱し、案外と料理とワインを楽しんできた。引き続き資金援助は行うどころか、何ならその額を二割増しにさせたのはスティーブンのせめてもの意趣返しだ。相手の渋る顔を拝むことができたのはスティーブンにとっても、ライブラにとっても僥倖だろう。バックアップしてくれる資金提供者はいくら居ても困ることはない。

フロントガラス越し、ビルとビルの間から、一際高い、スティーブンが寝起きしているマンションの姿が見えてきた。

それなりにセキュリティがしっかりしており、且つ、ライブラという秘密結社のナンバー2という人物が住むのに相応しいマンションは、そもそも一フロアに二世帯しか入っていない高級マ

ンションだ。会ったことは一度もないが、住んでいるのは有名モデルやら大物俳優やら、スティーブンと同じく（？）金を持て余した独身の会社経営者やらであるらしい。

スティーブンの住まう部屋には、リビング・ダイニング・キッチンが各々二つずつあり、特にキッチンは有名店のシェフたちを呼んで調理してもらえる程度には広く、設備も整っている。ダイニングも、二十人からが一度に会食できるほどの広さを持っている。また、寝室に客間、書斎等々、他にも幾つもの部屋があるが、その何れも、こちらに来て三年余り、一度として使われることはなかった。

この部屋を決めたのは、箔付けしやすい分かりやすいラグジュアリー感と、セキュリティの高さ、窓からの眺めだったため、使いもしない大量の空き部屋について、組織の立場とかそういうものを一旦置いたスティーブン個人の意見としては、ただただ無駄である。

車は良い。スティーブンは自分で運転するのが苦ではない。寧ろ、飛行機やら地下鉄やら、己の意思で進むことができない乗り物の方がストレスである。この、日々思いもよらない様々な事件に遭遇するＨＬにおいて、特注のイタリア車を購入し、自ら運転したいと考える程度には愛着がある。

一方、このＨＬにおけるスティーブンの自宅等、精々眠りに帰るだけの箱である。金を無駄にかけるのすら些か虚しい。待っている家族が居るわけでなし。そう、家族だ。

待つ者も居ない、ぼんやりと空虚な自室――しかも無駄に広い――に戻るのは、ほんの少しだけ、侘しさを感じる。いつもではない。ふとしたときに、この思いが、水底からこぽりこぽりと湧き上がる泡のように顔を出すだけだ。

――あれ？

目測で己の部屋がある階を見つめていると、どういう訳か自室の明かりが点いていた。間違いなく朝自分は消していったし、家政婦であるヴェデットがもしかして消し忘れてしまったのだろうか。彼女にしては珍しい。

家政婦のヴェデットは異世界側の人間（？）だけれども、味覚はヒューマーと同じくしており、作る料理は絶品である。また温め直せば食べられる、魔法のような料理の数々を作り置きしてくれているだろう。

高層マンションの地下駐車場に車を停める。

それにしても今晩は疲れた。今更ながら襟元をくつろげる。話し合いがまとまった直後に簡単にクラウスには結果を報告してあるし、明日はゆっくりして良い筈だ。身体と脳みそをオフモードに切り替える。今日はもう、寝るだけだ。

ゆらりと運転席から降りると、すっと影が付き添ってきた。

「お疲れさまです、マスター」

「ああ。……お疲れ。お前たちも今日はもう休んでいいぞ」

「あの、そのことに関して報告が……」

「悪い、明日にしてくれ」

「ですが……」

「なんだ？急ぎの用なら――」
「いえ、そういう訳ではないのですが、
「――おやすみ」
急ぎの用でないならば、明日改めて聞
れくらいの判別は彼もつくだろうに、や
め半ば無理矢理話を切り上げてしまう。
「……は、おやすみなさいませ――」
珍しく歯切れ悪く食い下がったステイ
らに、少しだけ疑問が過ぎったが、本当
っと強く言ってくる筈だし、どちらかと
いたように思う。
エレベータの内と外、二段階の物理キ
もってエレベータのロック解除をして、ス
のボタンを押すと音もなく上昇を始める。
覚を僅かに感じながらその狭い箱に寄り
数分、数歩で、恋しいベッドに辿り着け
心ゆくまで今晩は眠って、ヴェデットが
を食べよう。今日は通いの日ではないけ
いるローストビーフはまだある筈。近所の
ゲットも確か残っていたし、それで美味い
を食べよう。そんな算段を付ける。
一瞬、誰か――恋人や伴侶とする者だ
だけれど素敵なブランチを作ってくれた
ぐに詮無いことだと思い直す。いや、淋

中するあまり、会話の断片しか拾っていなかったであろうクラウスが、中途半端に会話に参戦してくるからややこしい。折角気を遣ってスティーブンの気持ちが分かるとフォローしてくれていた少年までもが困惑している。そんなことは一言も言っていないし、君の勘違いだと懸命に言い聞かせれば、分かったのかなんなのか、クラウスは「もしそんなことになるのなら、スケジュールを開けなければ」等と呟くのだから、またヒヤリとする。クラウスの口にした予定というものが、一体どういうものを指すのか、考えただけで色々頭が痛い。

そう、現在スティーブンは結婚する予定は皆無ではあるが、決して恋人がいない訳ではない。目の前の、存在感のある巨躯の紳士、クラウスがその相手である。多分、クラウスも言うつもりはなかったのだろう。ある日ぽろりと口にした愛しているというその一言から、二人の関係は変わった。いや、恋人という関係が新たに増えたのだ。ついでに言い添えるならば、スティーブンがクラウスに抱かれる側である。真摯に見据えるペリドットの瞳に絆され、どこで覚えてきたのだと驚く程の情熱的な口説き文句に動揺している間に、上下の関係は決していたのだ。それなりに浮名を流していた身としては一生ものの不覚だが、クラウスが喜ぶならばそれでいいかと思えてしまう自分も大概だと思っている。

結局あの場は、独身貴族の気楽さと侘しさはトレードオフなのだと、その気楽さを取っているのだと精一杯の体面を取り繕って（繕いきれていないとは考えたくない）あの場を出て仕事に赴いたのだったか。はあ、と小さくため息を吐く。格好が付かないところを晒

部屋に
なかった
暖かな風
したら、
考えた。
たから、
かったと
この日
抑制やら
明確な
た。疲労
かの気配
……な
まえ、等と
きたが、私
かと今更
告するく
とは言わ
端な報告
今更のよ
けた。

果たしてそこに居たのは、燃えるように真っ赤な髪をしたクラウスその人であった。

……えーと、これ、どうしよう。

散々、警戒心の塊のような状態で十数メートルを進んできたのが酷く馬鹿らしくなった。――ああ！確かにこれはあいつらも困るよな！そうだよな！俺にしか対応できないワケだ！スティーブンは内心一人ごちた。

彼らのボスたるスティーブンの自宅に、スティーブンの元相棒・現上司であるクラウスが訪ねてきては、断るに断れない。というか、クラウスにその存在を明かしていない以上、表立ってどうこうすることは不可能だ。めちゃくちゃ八つ当たりして悪かった――とひっそり詫びを入れながら、改めてクラウスに向き直った。

ソファのすぐ近くでしゃがみこみ、視線の高さを合わせ彼を覗き込む。

「うーーん。良く寝てる……」

クラウスはスティーブンの部屋のソファセットに腰掛け、近くに放置していたブランケット――ちなみにバーバリーだ――を申し訳程度に膝にかけて熟睡していた。それなりの大きさのカシミアブランケットなのだが、さすがにクラウスの巨躯には膝から腿、腹の辺りまでを覆うのみである。しかも少し身動ぎすればたちどころに取れてしまうだろう。

明日は、緊急の用件さえなければ出動はなし、ということになっている。一応、ライブラにも就業規則のようなものはあり、当然休日というものは存在する。まあ年中どこかしらで何かしらが起きているヘルサレムズロットにおいてそれが殆ど用を成していないだけなのである。

「そっか。来てくれた、のか……」

もしかしたら、昼間の話を聞いてくれていたのかもしれない。クラウスなりに誘えたらしいリビングの様子を見て、スティーブンはくすりと笑った。

それにしても、だ。仮にも長年バディとしてコンビを組み、ここ数年は更にステディとしての関係も結んでいる無二の相手であるクラウスの気配に気付くことができなかったとは。彼には口が裂けても言えないなと、ひっそり反省する。

どうやら部屋は快適な室温に保たれ、照明も、シーリングライトは落とし、明るすぎない柔らかな間接照明を使っている。スティーブンの些か赤みがかった柔らかなブラウンアイには暗すぎる程だが、スティーブンが好むところの演出ではあった。

漂う香りは彼が買ってきた花だろうか。いや、クラウスが手ずから育てた花かもしれない。彼の温室ならば、まだ秋咲きのバラがぎりぎり花を咲かせているだろう。可愛らしい淡いオレンジから黄色のバラは、もしかしなくともスティーブンのよく身に付けているタイの色からだろうか。

ローテーブルには大きめのトレイが載せられ、そこにはティーカップと分厚いマグカップが用意されている。きっと、紅茶なり

コーヒーなりが準備されているのだろう。また同じくトレイには皿が載せられており、そこには、チョコレートやらクッキーやら、サンドウィッチといった摘める小菓子や軽食が小奇麗に盛り付けてある。ティーンのパジャマパーティでもあるまいに。未だクラウスが目を覚まさないようなので、答え合わせをしにキッチンへと足を向ける。スティーブンの自宅にはキッチンスペースは二か所あり、専ら使われているのはリビングの一角に面しているアイランド型のキッチンスペースだ。時折自宅でパーティをするため、こちらの方が使い勝手が良いのだ。

リビングのソファセットも良く見えるアイランドキッチンには、温めればすぐに準備できるようにセットされたホットチョコレートやらコーヒー豆やら紅茶葉とティーポットやらがセッティングされている。ああ、そうか。会食で、酒も入るから、敢えてのこのチョイスなのだろう。いや、甘いものが多いのは間違いなく彼の好みでもあるのだろうが。

彼の気遣いを思って、スティーブンは心がじんわりと温まった。きっと、暗い、明かりの点いていない部屋に帰るのは淋しいと、ちょっとした愚痴を溢した自分への、クラウスの思いやりだ。

クラウスだって、決して暇を持て余している訳ではない。彼にしか作りえない人脈を作り、そこから情報を得てくることだってあるし、組織の長として、様々なところからの圧力に対していかなければならない。補佐としてスティーブンが居るが、彼にしか対応できないことも多い。そんな中、こうしてスティーブンの自宅を訪ねてくれた。結局、サプライズミッションを完遂し得ないままうっかり寝こけてしまう程度には疲れているのに。それがひどく嬉しい。

一旦ベッドルームに足を向け、毛布を持ってくる。十分快適に保たれた室内だけれど、寝ているときは体温が下がっている。あった方がいいだろう。そっと毛布をクラウスの体にかけ――さすがにこれはクラウスの全身をふんわりと包んでくれた――様子を窺う。ぴくりと指先が動いたけれど、起きる気配はなかった。

肘掛に置いていたクラウスの手先が、ブランケットからはみ出している。ふと思ってブランケットを覆う前にそっと取り上げ、その甲に、節立った指に口付ける。

「……さすがにここまで目が覚めないのは珍しいなあ」

起きるかと思ったのだが、尚も眠っている様子のクラウスを置き、一先ず今晩の疲れを洗い流してしまおうと、スティーブンはシャワールームへと踵を返した。

＊

感覚器官が何かを感じ取り、意識が覚醒した。香り、嗅覚だ。ミルクが温まる柔らかな香りと、苦みのある複雑で芳醇な香り、コーヒーをドリップしている香りだ。

はて、とクラウスは首を傾げ、先程とは感触の異なる己の全身を覆うブランケットを見やる。自室のものではない。と気付き、しまったと思った。

「やあ、お目覚めかな、プリンセス？」
少し離れたキッチンスペースから、甘く柔らかな声が聞こえた。スティーブンだ。
「スティーブン！すまない！いつの間に帰って――――！」
「――悪い、今ちょっと手が離せなくてね」
良かったらこちらへ来てもらえると助かるとスティーブンが口にしたので、クラウスは慌てて飛び起きて彼の元へ急ぐ。

キッチンスペースでちょこまかと動き回る彼は、いつもの恰好ではなかった。帰宅し、既に着替えたらしく、ぱりっとハリのある、けれど彼のボディラインにうつくしく沿ったスーツ姿ではない。普段なかなかお目にかかることのできない、ゆったりとした部屋着に身を包んだスティーブンは、挽いたばかりのコーヒーにゆっくりと湯を落としながら、横目で茶葉の蒸らし時間を厳密に計っていた。
「スティーブン！これは……！」
「折角君が準備してくれていたみたいだったからちょっとね。よかったよ、ちょうど出来上がるところで目を覚ましてくれた」
大きな体を精一杯縮こませ、恐縮したようにあせあせと小汗を飛ばすクラウスを、硝子製のドリッパー越しに見たスティーブンはからからと笑っている。
「どうだい？サプライズは大成功だろう？」
そう言いながらクラウスをいたずらっぽそうに見上げてくる彼は、日頃目にする彼のどの表情とも異なり、幼げで楽しそうだ。クラウスとしては、苦虫を噛み潰しながら只管恐縮する他なかった。今クラウスにできるのは、精々紅茶を淹れるのを代わってやるくらいだ。驚かせようと思ったのに、まんまと一杯食わされてしまった。
「チョコラーテは明日にしようか。あと、ブランチでローストビーフのサンドウィッチを作るよ。ヴェデットのは美味いから。楽しみにしているといい。ワインと良く合うんだ」
「ホットチョコレートは、スティーブン、君の飲みたいときに飲んでくれて構わない。……君の手作りなら楽しみだ。けれど悪いがそのサンドウィッチに合うのは間違いなくビールだ。私のおすすめは――」
「はは。クラウスがようやく笑った。じゃあ互いのおすすめをそれぞれ買いに行こうか。負けた方が――」
「会計を持とう」
「いいだろう。スペイン産のワインを楽しみにしているといいよ」
ニッとクラウスの方を見て笑うスティーブンは良い具合に肩の力が抜けている。普段顔を合わせるのが、事務所であったり、クラウスの自宅だったりなので、どうしても彼の自室のようにはいかないのだろう。こちらに事務所を構えてから、こういう風に仕事のこと関係なしに話をする機会がどうしても少なくなってしまっている。互いに組織を背負う立場である以上、むつかしいのは分かっているのだが、それなりに長くバディとして組んでいたため、こういう気安い会話が懐かしい。
だから恋人（何と気恥ずかしくも嬉しい呼び名だろうか！）と

して、疲れた相手をひたすらに寛がせてやりたいと思って、今回の計画を思いついた。

引っ越しを手伝った際に渡されたものの、一度も使っていなかったスティーブンの自室の鍵を初めて使ってみたのだが、この年上の、肩肘張って生きている大事な恋人を甘やかすプランは、どうやら成功したとは言い難い結果となってしまった。

時間を確認し、ミルクティにするつもりで少しだけ濃い目に淹れようと決める。茶葉の量は確認できていないが、ギルベルトまではいかないもののスティーブンも紅茶を淹れるのは美味い。というか、クラウスの好みであるので恐らく問題ない。ちらりと砂時計の残り時間を確認し、ソファセットのテーブルに用意していたカップ類を持ってくる。

「よし、出来上がりだ。すまないが持っていくのを手伝ってもらえるかな、ハニー?」

「……む。了解だ、ダーリン!」

勝手に部屋に入ったこと、眠ってしまったことについてはきちんと謝ろう。けれど、それ以外のことについては、どうやらこの恋人がひどく楽しそうにしているのでもういいかと気にしないことにしよう。彼の笑顔は自分の喜びだ。

「スティーブン、すまなかった、その……」

クラウスはミルクティを、スティーブンはカフェオレのようだ。各々たっぷり注いだ大きなマグカップをカチリと小さく合わせて乾杯をする。表情を和らげ、リラックスしてマグを傾けるスティーブンを見て、クラウスもほっと息を吐く。子どもじみたサライズだが、それなりにアルコールを入れてくるであろう彼に一息ついて欲しかったのだ。

「ああ、気にしないでくれ。寧ろ嬉しかったんだ。クラウス、りがとう」

「今晩は何も起こらなそうだったし、いつも君が私のところをねてくれるから……」

「たまには、と思ってくれた?嬉しいなあ」

「なのにすっかり眠ってしまった」

「いいや?俺は嬉しいと思ったけど?」

普段スティーブンはクラウスがぐっすりと眠っているとこ等なかなかお目にかかることができない。

クラウスは、その鋼のような強靭な肉体と相俟って、精神の も頗る強くしなやかだ。無論だからと言って顔や態度に全く出 いという訳ではない。勿論欠片も出さないようにすることも或 はできるのかもしれないが、少なくともスティーブンの前では うやって取り繕っている様子を見せないのは、スティーブンに って喜ばしいことだし、ライブラという組織の長として、彼の の実直且つ生真面目な性質を同胞に見せるには好ましいと思う けれど、当然だが仕事場で転寝をするような状況に陥っている 子は見せない。(ザップじゃあるまいし!)

或いは、二人でベッドを共にするようになってからも、諸々 事情でスティーブンの方が先に眠ってしまうことの方が多か た。これはスティーブンとしては非常に釈然としないが、クラ

スは所謂ショートスリーパー体質なのか、彼の方が先に目覚めていることの方が断然多いし、スティーブンが目を覚ませば気配で彼もまた、目を覚ましてしまうことの方が多い。大体、ベッドで眠る姿と、ああしてソファで転寝をしている姿は同じようでいてなかなか全然異なるものだ。つい、気を緩めてしまったのだろう。自室以外で。スティーブンの部屋で。

「ここは、君がリラックスできる場所なんだってことなんだろう？」

つまりはそういうことだ。恐らく片手で数える程しか訪れたことがないであろう、スティーブンの部屋で、クラウスはまるで自室のように寛ぐことができた。スティーブンに心から気を許してくれている、ということの証左だろう。

「言い訳にもならないが。君の気配が、残り香がして……いや、このブランケットからだろうか。君の匂いを感じて。……とても安心する、良い、香りだったのだ。だから――」

「ああ！もう！言わなくてもいいよ！いつから君はライナスになったんだ？！」

「何を言うスティーブン。私の名はクラウス――」

「――そういうことじゃないよ！もういいから！少し黙ってくれないか！」

赤い顔を自覚しながらスティーブンが左手を伸ばし、その手でクラウスの大きな口を塞ぐ。

「ふてぃーふん、ふぉのへをはひへふへふぁいふぁおうふぁ」

「は？何て？！その手を離してくれないだろうか？……君が余計なことを言わなかったら、あるいはね！」

「む……！ふぁあふぁ」

ぬるり、スティーブンの掌に生温かなものが触れた。クラウスの、舌だ。

やられた、と思って慌てて手を引こうとするも、その手をクラウスに取られてしまう。ぐっと腕を引き寄せられその腕の中に閉じ込められてしまえば、体格的に大いに不利なスティーブンに残された手段はほぼ無い。無骨な手がさらりとスティーブンの顎を撫でるのは合図だ。薄っすらと唇を開いて彼の唇を受け入れる。

クラウスが、彼の下の犬歯が当たらないようそっと唇に触れてくる。スティーブンの下唇を食み、湿らせるように唾液で潤してゆく。平均よりも大分背の高い己すら、すっぽりと抱き込める大きな手、腕、体は温かく気持ちが良い。

熱くなってしまえば寧ろ積極的に攻めてくるというのに、キスの始まりは、クラウスはただただスティーブンを傷付けぬようにと慎重に、窺うように口付けてくるのがいつもだ。窺うようにゆっくり、慰めるようにひたひたと触れてくる彼の唇を、舌を、その舌で以て迎え入れてやるのはスティーブンの役割だ。

「――っ、む、ん……」

クラウスがスティーブンの手の中のマグを取り上げ、近くのテーブルに載せる。ガラスの天板がカツンと小さく鳴った。何よりも甘いスティーブンの唇を、舌を、もっと堪能したいと思って、彼に乗り上げる。

ブラウンシュガーとミルクの味がす
筋からは洗い立てのシャンプーやボデ
より、スティーブン自身の香りが眼前
ランケットに包まれた身体は温かく、
一枚からはすぐ間近にスティーブンの
誂えられたようにクラウスにとって
ティーブンに触れたくて、その大きな
てゆく。

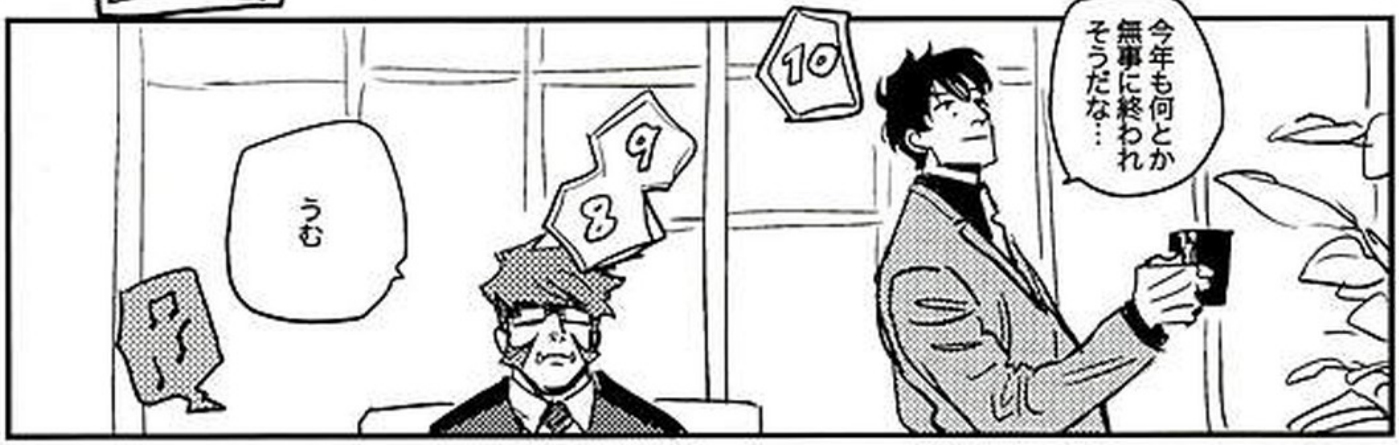
「――っ、あ――……あったか……ん、
キスの合間にそんな風に溢すスティ
いと思って、引き続き唇は合わせたま
を撫ぜる。

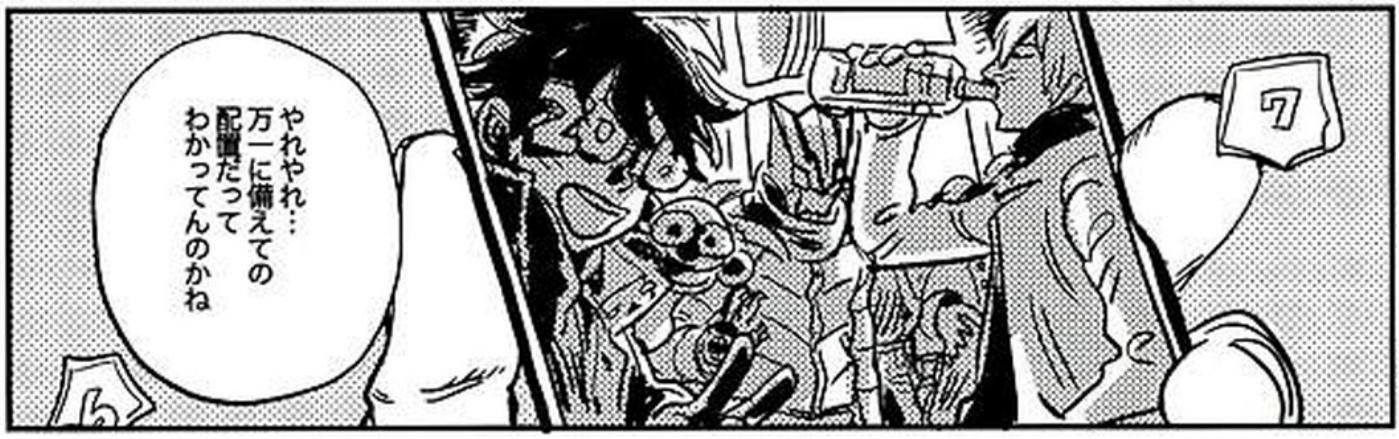
「んんっ……あ――」

ごろりと体勢を入れ替え、毛布にく
ンがクラウスの体に乗り上げた。床暖
長い、手触りの良いラグは普段あまり
いクラウスだけれども気持が良いと思
った暖かなブランケットと、腕の中に
暖炉もあれば完璧だろう。戦いの中に
たまには、こんなささやかな幸せがあ
うか等と己の思考に浸っていたら、何
てきた。

そっと下から覗きこむと、スティーブ
な寝息をたててていた。

10秒を切りました！2016年も目前です！
FOOOO!
2016


今年も何とか無事に終われそうだな…
うむ


やれやれ…万一に備えての配置だってわかってんのかね

状況報告：異常なし…とのことだ
大目に見てやってくれスティーブン

ドーン!!
2
1
HAPPY NEW YEAR
明けたか
おお

ハッピーニューイヤークラウス
明けましておめでとうスティーブン
新たな年もつつがなくこの日を迎えられるようどうかよろしく頼む

堅いなぁどうも

こっちのこともちょっとは大目に見て欲しいもんだ
RRRRRR

…ウィ
レオかどうした

わかった
僕たちも向かう
カッ
カ
スピーカーに
切り替えるから
状況報告を……おい
レオ?
スティーブン
待て
雑音が酷い…

レオ、私だ
ひとまず其処を離れて
身の安全の確保を
ツェッドが?
わかった
我々も
すぐに追いつく

行こうスティーブン
ライブラの出番だ

……
イエス ボス…

end

Blood Blockade Battlefront
Unofficial Fanbook